

## ポルトガル語の辞書における文法記述の前提

### Informações gramaticais nos dicionários do português

坂東 照啓

Teruhiro BANDO

#### 0. はじめに

ポルトガル語の伝統的な文法書において、統語論が扱う現象は、一般に呼応、支配、語順の3つである。ブラジルのポルトガル語文法教育で一般に採用されているNGB (Nomenclatura Gramática Brasileira) においても、統語論の分類 (Divisão da sintaxe) として呼応、支配、語順の3つが提示されている。このうち、支配は個々の語に関する特徴であり、一般の辞書の中心が語義の記述にあるとしても、辞書に求められる情報の1つと考えられる。しかし、支配については、一般のポルトガル語—ポルトガル語辞典にはあまり詳しく述べられていない。そのため、支配に関する情報を得ようとすれば、一般の辞書とは別の、支配に記述の重点を置いた、あるいは支配に特化した辞書を参照せねばならないのである。こうした支配に関する記述をしている辞書としては、動詞支配辞典である Luft (1987)、名詞支配辞典である Luft (1992) といったところが知られている。

本稿では、ポルトガル語の一般の辞書の現状を示すとともに、重要な文法情報の1つである支配を記述している Luft(1987) 等の支配辞典について、その特徴の分析を通して、利用者の立場から求められる理想とされるような辞書 (いわゆる「ユーザーフレンドリー」な辞書) の条件にも言及したい。

#### 1. 辞書の構成と内容

一般に辞書は、語をアルファベット、50音など一定の順に配列し、その語義を記述したものである。しかし、実際にはさまざまな辞書が存在し、それらはおよそ使用言語、提供情報、対象 (使用者) によって分類されうる。普通の一般的な辞書の場合、使用言語は一言語、提供情報は主として語義、対象は母語話者であるが、見出しと説明が別言語であったり、特定の分野の語、表現に限定して定義・解説を施したり、語義以外の情報を与えたり、非母語話者を対象とするような辞書も存在する。

一般辞書の主たる情報は語義であるが、必ずしも語義だけが記述されるというわけではない。辞書により、あるいは語彙により、語義以外に (1a—1e) も掲載されることがある。

##### (1) a. 発音

##### b. 文法 (形態・統語)

##### c. 熟語・慣用句、関連語彙 (類義語、反意語、派生語)

#### d. 語源

#### e. 文化的情報 (使用レベルを含む)

こうした辞書の実際の編集においては、データの収集・記録 — 分析・記述 — 情報開示が一連の中核的作業となる。しかし、辞書の編集は、全く白紙の状態から始められるのではなく、すでに存在する辞書をもとにして行われる場合が多い。

## 2. ポルトガル語の辞書

### 2. 1. 現在出版されている現代ポルトガル語の辞書

1990年以前のポルトガル語の辞書については、池上 (1992: 314-333) において紹介、解説がなされている。しかし、その後出版された辞書、さらに近年の急速な通信・情報分野の発達と普及に伴って登場しているオンライン辞書もあるので、ここでは主としてこれら最近のポルトガル語辞書について述べる。

#### 2. 1. 1. ポルトガル語—日本語辞典

ポルトガル語—日本語辞書では、1996年に池上岑夫・金七紀男・高橋都彦編 (1996) が出版され、現在、ポルトガル語を学ぶ日本語母語話者にとっての第1選択辞書となっている。見出語数は中見出も含め、約5万3千であり、すべての見出語について国際音声字母によるブラジル標準発音が示されている<sup>(1)</sup>。内容は、「まえがき」にも挙げられている Ferreira (1999) の第2版 (1986) が基本的な下地になっていると見受けられ、巻末には「発音概説」、「和ポ索引」、「動詞活用表」が掲載されている。

この辞書が出版されるまでは、浜口乃二雄・佐野泰彦 編 (1973)、坂根茂・日向ノエミア 編 (1993) といった辞書が一般に用いられたが、前者は、初版 (1970) の出版後の1971年に正書法の改訂があったために、古くなってしまった表記が見られるという問題を含み、後者はポルトガル語母語話者向けのため、タイトルにもあるようにローマ字を用いて語義が示されており、日本語母語話者には決して使いやすいとは言えなかった。

言語学習における最も基本的道具とも言える辞書について、このような不満が持たれる状況の下で、新たな使いやすいポルトガル語—日本語辞書が切に求められていたわけである。そこに現れた辞書が、池上他 編 (1996) であり、日本語を母語とするポルトガル語学習者が抱いていたそれまでの不満を解消する記述内容を有するものとなっている<sup>(2)</sup>。

#### 2. 1. 2. ポルトガル語—ポルトガル語辞典

ポルトガル語—ポルトガル語辞典に関しては、Ferreira (1994) が1999年に改訂され、注目される<sup>(3)</sup>。この Ferreira (1999) は、初版が1975年、第2版が1986年に出されており、これが第3版になる。初版からすでに、現代ポルトガル語辞典として最も高く評価しうる内容を備えていたものであるが、第3版では、見出語数が43万5千に達し、記述内容にも第2版から大幅な変更が見られる。特に、*cíberespaço* 「サイバースペース」、*multimídia* 「マルチメディア」などが見出語に加えられたり、*vírus* の語義に「コンピューターウイルス」が加えられたりと、通信・情報分野の語彙に関して、近年のその急速な発達、普及を反映し、記述が増

している。また、特に日本のバブル経済期に（日系）ブラジル人労働者が急増したことから取り入れられたと考えられる *decasségui* 「出稼ぎ」といった語も見出語に加わっている<sup>(4)</sup>。さらに記述内容だけでなく、この第3版からは新たに絵記号が用いられるとともに、見出語とこの絵記号が朱色の印刷で2色刷となっており、見やすさの面でも工夫が凝らされている。

この *Ferreira* (1999) が出版される前年には、*Michaelis* (1998) も出版された。見出語数は20万以上を有し、これも高く評価しうる内容を備えた辞書である。*Ferreira* (1999) と異なる点として、見出語が分節表記（綴り字の分かち書き）されていることが指摘される。用例は、文学作品からの直接引用の場合でも、難易度の高いとみなされる語が含まれるものは避けられているようで、語義の理解を助けるという機能をよく果たしている。巻末の付録の中には、集合名詞、擬声語・擬音語の一覧などの掲載があり、興味深い情報を提供している。

ブラジルで上述の *Ferreira* (1999)、*Michaelis* (1998) が出版されたのに対し、ポルトガルでは、*DULP* (1999) が出版されている。見出語数は9万5千320で前述の2つの辞典に比べると少ないが、基本的に現代のポルトガルにおけるポルトガル語を対象とした辞書として価値ある存在となっている。

近年の辞書の新たな形態として、すでに一般化しつつある CD-ROM版に加え、インターネット上で検索できるオンライン辞書が現れている。ブラジルで開かれているオンライン辞書としては、前述した *Michaelis* (1998) と基本的に同じ検索結果が得られる *UOL-Michaelis* (<http://www.uol.com.br/michaelis/>) がある。このサイトでは、検索した語が存在しないような場合には、その語を知らせてもらうよう呼びかけており、広く一般から情報を求め、新語採集を行う姿勢もうかがえる。ポルトガルにおいても、前述の *DULP* (1999) に基づいた *Dicionário da Língua Portuguesa On-line* (<http://www.priberam.pt/DLPO/>) がオンライン辞書として開かれている。このオンライン辞書での語義解説は、紙媒体の *DULP* (1999) を簡潔にしたものだが、多様な検索方法を提供しており、検索によって派生的な知識が得られる可能性もある。さらにこのサイトは、辞書機能に加え、ポルトガル語の文法を整理して掲載しており、基本的な文法知識を得ることもできる。

## 2. 2. ポルトガル語—ポルトガル語辞典の記述内容

### 2. 2. 1. 一般的な特徴

一般に辞書には語義の他にも関連する情報が記載される。机上で用いるような大型のポルトガル語—ポルトガル語辞典であれば、語義だけでなく語源と文法に関する記述が見られる。この文法情報には、語類（品詞）、名詞の性、不規則な名詞・形容詞の変化形、複合語の変化形、動詞の不規則活用形、動詞の叙述 (*predicação*) による分類といったものが含まれる。

しかし、文法情報でも、名詞の可算・不可算の別、述語（動詞、名詞、形容詞）及び接続詞が要求する法（直説法／接続法）などについては記載がない。分節についても、*Michaelis* (1998) 以外では示されていない。

発音もほとんどの辞書で記載されていない。もっとも、綴り字と発音が大部分で規則的に対応するので、すべての見出語に発音を表示する必要性はないと考えられる。ただし、強勢位置の *e*, *o* と *x* については表示されることも少なくない。この

理由は、e, oがそれぞれ [e]/[ɛ]、[o]/[ɔ] のいずれであるか、xが [z]、[ʃ]、[s]、[ks] のいずれであるか、綴り字から判断できないためと考えられる。

## 2. 2. 2. 発音表示

前節で述べたように、ポルトガル語—ポルトガル語辞典は一般に発音を示していない。ポルトガル語—他言語辞書であっても、発音は必ずしも示されていないのである。しかし、VDPB, ABLN においてはすべての見出語に発音が記載されている。いずれも国際音声字母を用いているわけではないが、VDPB はポルトガルのポルトガル語の発音を示し、ABLN はブラジルのポルトガル語の発音を示している<sup>(5)</sup>。両者においては実際(2)のように音声表記がなされている<sup>(6)</sup>。

(2)

	VDPB	ABLN
entender	[ãjtêjđer]	[itê'deɪ]
experiência	[ɔjʃperjêsia]	[iʃpiri'yêsyɑ]
receitar	[řesajtár]	[řeseĩ'tɑɪ]
secção	[sɛksáw]	[se'sãũ] (seção)
oposto	[upóʃtu]	[o'poʃtu]
optar	[optár]	[op'tɑɪ]
ocorrer	[ocuřér]	[oko'řeɪ]

VDPB, ABLN ではポルトガルとブラジルの発音の違いだけでなく、強勢の表示の方法が異なっていることが観察される。つまり、VDPB では母音の上に表示され、ABLN では音節の前に表示されているのである。VDPB のように強勢を母音の上に表示することは、ポルトガル語に限らずロマンス諸語の辞書では珍しい。VDPB において強勢を母音の上に表示している理由は不明であるが、一般に英和辞書が母音の上に表示する方式を採っているの、これに親しんだ日本人学習者であれば音節の前に表示するよりむしろわかりやすいのではないかと考えられる。

## 3. 動詞叙述と動詞の分類

動詞叙述は、動詞の文法的特徴を記述する際の基本概念であり、Luft (1986:32) において次のように述べられている。

(3) o resultado da conexão entre sujeito e verbo, verbo e complemento (sujeito ↔ Verbo ↔ Complemento) é a predicação ou regência verbal.

動詞は、この叙述すなわち支配によって、一般に verbo de ligação, verbo de intransitivo, verbo de transitivo (direto, indireto) の3種に分類される。この3つについて、Luft (1986:33-36) では(4a-4c)のように記述している。

(4) a. verbo de ligação

é o que une o predicativo ao sujeito. É uma palavra gramatical, relacional, como os conectivos (conjunção e preposição); por isso também se chama verbo relacional, em

oposição aos outros, ditos *nocionais* (terminologia de Said Ali que, entre os *relacionais*, inclui os auxiliares).  
Outro nome: verbo predicativo.

b. verbo de intransitivo

é o verbo de "predicação completa", o que não necessita de "complemento".

c. verbo de transitivo (direto, indireto)

necessita de complemento — objeto — que lhe "complete" o sentido. Pode ser *direto*, *indireto* ou *direto e indireto*.

verbo de ligação は、しばしば verbo de intransitivo の一種ともみなされる。しかし、verbo de ligação の要求する補語が、verbo de transitivo が要求する目的語と同じように義務的な要素であるという特徴に着目し、verbo de ligação をむしろ verbo de transitivo の一種とみなす立場もある<sup>(7)</sup>。

#### 4. 動詞支配辞典における記述の基礎と特徴

動詞支配辞典は、見出語が動詞に限られるが、一般の辞書とは異なり、語義よりも主としてどのような要素と関係し、結びつくかといった文法的特徴について記載している辞書である。

##### 4. 1. Luft (1987) の Introdução と特徴

Luft (1987) では、支配に関する解説が Introdução (5-17) においてなされている。(5) がその Introdução の構成である。

###### (5) Introdução

Pressupostos teóricos

1. Regência
2. Regência: nominal/verbal
3. Regência verbal e padrões oracionais
4. Padrões oracionais
5. Padrões oracionais e classificação dos verbos
6. Verbos pronominais
7. Intransitivização e transitivização
8. Regência de preposições
9. Regência e evolução

Apresentação dos verbetes

Introdução 1-2 において、まず、支配という用語の解釈に広義と狭義があり、広義では、従属一般と同義であり、呼応は支配の結果であると述べられている。これに対し、狭義では、補う要素が従属するという特別な従属であり、動詞あるいは名詞類(名詞、形容詞、副詞)の意味に基づき、それを補う要素の必要性あるいは不必要性であると述べられている。

Introdução 3 では、文に主語、動詞、動詞の補語/述語、副詞的修飾語の4つの位置があり、この4つによって統語的な型すなわち文型が構成されると述べている。ここで、しばしば問題となる補語と副詞的修飾語の区別についても述べられて

いる。この両者を区別をする基準としては、動詞の意味特徴からそもそも要求されるか、ということを示している。さらに、動詞には一般動詞とつなぎ動詞の2種類あり、前者は動詞を核とする動詞文型、後者は名詞類を核とする名詞類文型を構成すると述べられている。

Introdução 4 では、文型が主語、動詞、動詞の補語／述語の3つによって決まると述べられている。実際には、前に述べた動詞文型と名詞類文型のそれぞれが、主語の有無によって人称的と非人称的に下位分類され、そして（直接・間接）目的語の有無、述語の語類によって設定される17の文型が列挙されている。述部の核として動詞と名詞類の2つがある混合文型については、すでに示した動詞文型と名詞類文型を1つに縮約し派生されるので、基本文型とはみなさないとしている。ただし、実用的観点からとして、混合文型についても3つに分類している。

Introdução 5 では、先に述べた文型に、動詞の分類を対応させている。20種の文型に対し12種の動詞を対応させているのである。その内訳は、6種の人称動詞構文に対し4種の動詞、3種の非人称動詞構文に対し3種の動詞、4種の人称名詞類構文に対し1種の動詞、4種の非人称名詞類構文に対し1種の動詞、3種の動詞一名詞類（混合）構文に対し3種の動詞を対応させたものとなっている。

Introdução 6 では、前節で取り扱わなかった代名動詞について触れ、ここでは伝統的な考え方を採らず、4種に分類している。

Introdução 7 では、自動詞化と他動詞化について述べている。本来は補語（目的語）を伴う動詞であっても、補語を伴わずに現れることがあり、逆に、本来は補語を伴わない動詞であっても、補語を伴って現れることがある。つまり、他動詞が自動詞として現れたり、自動詞が他動詞として現れるということである。実際には、自動詞化は、補語が非限定化する場合に起こり、他動詞化は同族目的語をとる場合に起こる。さらに、自動詞が *se* を伴うことによる代名動詞化も他動詞化とみなし、逆に、代名動詞で *se* が省略されることを自動詞化とみなしている。補語に関しては、非限定化によって省略されることもあり、これによって文型も変わることを指摘している。

Introdução 8 では、前置詞の支配について述べている。いかなる前置詞が選ばれるかは、動詞の意味特徴によるとされている。つまり、動詞の意味特徴と一致する意味特徴を有する前置詞が選ばれるというのである。支配語である動詞の接頭辞と前置詞には、同じ形態素が現れるという規則（[Prefixo  $\alpha$  Verbo] Preposição  $\alpha$ ）が存在することも指摘されている。

Introdução 9 では、支配の変化について述べている。支配は不変ではなく、類似する意味を表わす他の動詞の支配に影響され、これと同じ支配へ変化が起こりうることを指摘している。この支配の変化には、他動詞から自動詞に変わる場合も、自動詞から他動詞に変化する場合もある。

上に示してきたように Luft (1987) における Introdução は、動詞支配に関する基礎にとどまらず、文型、前置詞の特徴、歴史的変化といった関連する問題についても広く論じている。実際の見出語に対する記述においては、古語／現代語体、口語／文語体といったスピーチレベルも記載され、呼応についても言及がなされている。記述はこのように詳しいが、決して専門的な知識を必要とするわけではなく、理解の助けとなる用例も豊富である。しかも非文情報（「～は文法的でない」）が

多く記載されている点は特徴的で、この辞書の教育的な価値を高めている。

#### 4. 2. Fernandes (1991) の動詞分類と特徴

Fernandes (1991) では、巻頭に *classificação dos verbos* (25-27) という項があり、25頁において(6)のように述べられている。

(6) ... para melhor se compreenderem os exemplos contidos neste livro, dividir-se-ão os verbos em: *intransitivos, relativos, birrelativos, transitivos, transitivo-relativos, predicativos, transitivo-predicativos, pronominais.*

この辞書では、動詞を8種に分類しているのである。動詞の分類は、Luft (1987) とこの Fernandes (1991) で異なるが、いずれも自動詞、他動詞、連結動詞という3種だけではなく、より細かいものになっている。どのような分類がなされるかについては、文法家によって分類基準が異なる上、実用的(あるいは教育・学習的)観点をどの程度重視するかという点からも違ってくると考えられる。

見出語に対する実際の記述は簡潔になされているが、使用されている例文は、大部分が文学作品からの引用で、しかも、その引用されている作品が16世紀から現代までと幅広い。序文の記述から、初版が1940年で、その後の版で訂正、増補されていることはわかるが、例文とともに今日ではやや古いとみなされる記述も見られる。

#### 4. 3. Borba (1997) の introdução と特徴

Borba (1997) は、書名に支配という語は見られないが、動詞の文法の重要な問題である支配について実質上記述がなされているものである。Borba (1997) では、introdução (IX-XVI) において、辞書を利用する上での前提となるような動詞の文法に関する解説がなされている。しかし、この解説には一般的な文法書では記述されないような専門的な内容も含まれている。

まず、動詞の分類に関しては、前述の2つの支配辞典でもなされている一般的な他動詞、自動詞、連結動詞といった分類はなされていない。基本的に意味に従って *ação, estado, ação-processo, processo* という分類がなされているのである。さらにこの辞書では、動詞の主語についても、人称的/非人称的という分類ではなく、XVI頁において(7)のように述べられている。

(7) O procedimento descritivo adotado é o de estabelecimento de oposições. A caracterização do verbo começa pela descrição do sujeito: um sujeito agente, por exemplo, opõe-se a um sujeito causativo; um sujeito agente expresso por nome animado, a um sujeito agente expresso por nome humano. O sujeito agente/causativo de um verbo de ação-processo opõe-se ao sujeito paciente/experimentador/ beneficiário de um verbo de processo que, por sua vez, se opõe ao sujeito inativo dos verbos de estado. Comumente o sujeito paciente de um verbo de processo provém do complemento de um verbo de ação-processo (cf. O sol queimou as plantas > As plantas queimaram (-se)). Nesse caso, apenas se menciona o sujeito paciente como se

opondo ao sujeito agente/causativo do item anterior.

主語も動詞の分類と同様に意味に基づき、*agente, beneficiário, causativo, experimentador, factitivo, inativo, paciente* という分類がなされているのである。さらにまた、補語（目的語）についても記述があり、分類がなされている。補語が *oração* 「文」の場合、*infinitiva, conjuncional, em discurso direto* に分類され、*nome* 「名詞（類）」の場合、*humano, animado, abstrato* などに細かく分類されている。

分類に使用されている用語には、上述のような専門的とみなされるものが含まれており、この文法用語の概念を理解する必要がある点では一般の利用者にとって使い易いと言えないかもしれない。しかし、この Borba (1997) では、動詞支配に関しきわめて詳しい記述がなされ、慣用表現まで掲載されている。例文も文学作品に限らずさまざまな分野から引用され、豊富な情報を備えた内容になっている。

#### 4. 4. 記述の実例の比較

4. 1, 4. 2, 4. 3 において、動詞支配を扱う3つの辞典について、それぞれの内容の前提となり、また、特徴の一端を示す巻頭部分の記述を考察した。ここで見出語に対しそれぞれの辞書でなされている実際の記述について、支配がしばしば問題となる *assistir* の場合を例に比較してみる。

(8) *assistir* 「見る」、「存する（、住む）」、「補佐する」、「看護する」

Fernandes (1991:103): *Relativo* — 「見る」、「存する (*em*)」、「看護する」。「看護する」の場合、*forma transitiva* もある。

*Transitivo* — 「補佐する」、「看護する」。「看護する」の場合、*forma relativa* もあるが、より古典的 (*Nesta acepção pode empregar-se a forma relativa, que, aliás, é mais encontrada nos clássicos*)。

注; *Na acepção de estar presente, comparecer, e tendo por complemento um pronome pessoal, não admite a forma *lhe*, mas a *ele*, a *ela*, a *eles*, a *elas* ....*

Luft (1987:79): 1. **TD(I)**, *assisti-lo (em)*, **TI**, *assistir-lhe (em)* — 「看護する」、「補佐する」。注; *Regência primitiva: assistir a alguém, assistir-lhe (cf. a redundância [Prefixo a- Vrebo + Preposição a]). Assistir alguém, assisti-lo é evolução regencial, certamente devida à pressão semântica dos sinônimos 'ajudar, auxiliar, proteger, acompanhar, confrontar, etc.'*

2. **TI**, *assistir a ele(s), assistir a ela(s)*, **TD**, *assisti-lo, INT, assistir* — 「見る」。**TI** に関する注; *Se for pronome pessoal o complemento, não se admitirá a forma *lhe(s)*, senão a *ele(s)*, a (*elas*)*。**TD** に関する注; *Assistir a algo, a ele(s), a ela(s) é a regência de origem, com a redundância [Prefixo a- Vrebo + Preposição a]. Por pressão semântica de 'ver, presenciar, observar', é natural a inovação*



regencial *assistir algo, assisti-lo ....* ... a construção passiva (*o jogo foi assistido, espetáculo assistido*) comprova a transitivação (direta) desse verbo.

3. **TI**, *assistir a alguém, assistir-lhe* 「存する」 / *assistir em ..., assistir lá* 「住む」

Borba (1997:172): I. Indica ação-processo com sujeito agente e com sujeito **agente** e com complemento expresso por nome **humano**, introduzido ou não por **a**. — 「補佐する」、「看護する」

II. Indica ação, com sujeito **agente** e com complemento expresso por nome **abstrato de ação/processo** ou por oração infinitiva, precedida ou não por **a**. — 「見る」。注; Neste caso, não se admite como complemento a forma *lhe(s)*, mas apenas as formas analíticas *a ele, ela, eles, elas ....*

III. Indica estado. 1. Com sujeito inativo expresso por nome humano e com locativo. — 「住む」: 2. Com sujeito **inativo** expresso por nome **abstrato** e com complemento da forma **a + nome humano**. — 「存する」

いずれの辞書でも、支配、文法的特徴とそれぞれに対する動詞の意味を記述している。補語（目的語）の [a 名詞句] が代名詞化する場合の形式についても、与格代名詞になるか、[a 主格代名詞] になるか注記されている。Luft (1987) ではさらに、*assistir* に生じた他動詞化の歴史的变化についても説明が加えられている。主語の（意味的）特徴については、Borba (1997) においてのみ記述されている。

## 5. むすび——理想的なポルトガル語辞典を目指して

評価される辞書であるための最も基本的な条件は、利用者にとって使いやすいということであろう。しかし、そこで問題となるのは利用者がさまざまであり、また同じ利用者であっても、求める情報が多岐に渡ることである。辞書使用者の目的、求める情報は幅広いので、あらゆる辞書使用者を満足させようとするれば、できるだけ多くのことを記載する必要がでてくる。しかし、こうしたあらゆる面に詳しい辞書は、利用者にとって、求める情報のありかがわかりにくく、かえって使いにくいものになる。そこで、特定の使用者（母語話者／非母語話者、言語習得段階別）を対象としたり、情報（の分野）を限定することが考えられる。

一般のポルトガル語—ポルトガル語辞典の場合、基本的に母語話者が対象であり、文法が大きく扱われることはない。支配辞典は、こうした一般辞書の記述を補う統語情報を記載しているわけで、その存在意義は大きいと言える。これに対し、日本語母語話者を対象とするポルトガル語—日本語辞典であれば、文法も重要な情報として求められる。支配は最も重要な文法情報のひとつとして詳しい記載が必要であろう。そこで実際にポルトガル語—日本語辞典に支配を記述する場合、本稿で述べたような支配辞典が参考になると考えられる。さらに今後、ポルトガル語—日本語辞典には、文法情報の1つとも言える非文情報を記載することも、教育的観点から価値が高いと考えられる。

## 〔注〕

\* 本稿は、日本ロマンス語学会第37回大会（2000年5月27日、於東京大学）において行った口頭発表の内容に、大幅な加筆と修正を加えたものである。この場を借りて、本研究を進めるに際し貴重な文献を提供して下さった河村昌造先生に心からお礼申し上げますとともに、発表会場で貴重なご意見を頂いた先生方に感謝の意を表す。

- (1) 一般に国際音声字母による発音表記は、正確な発音を示すことができるものの、実際のところ多くの利用者は国際音声字母に馴染みがない。そのため特に初学者には理解が困難で、あまり有効な表示方法ではないという問題がある。
- (2) もっとも、池上他編（1996）は、「まえがき」で「われわれの『現代ポルトガル語辞典』が大武の辞典を質量ともに越えるものであると言う気持ちは毛頭ない。収録語数こそ『葡和新辞典』を越えるが、質的にもこれを越えるか否か、これはわれわれの辞書を手にして下さる読者のかたがたの判断にゆだねるほかない。」とも述べているように、上述の浜口乃二雄・佐野泰彦編（1970）、坂根茂・日向ノエミア編（1986）ではなく、さらに古い大武和三郎編『葡和新辞典』（1937）を意識した辞書であることがうかがえる。現代においては、もはやこの大武編（1937）に実用的役割を求めることは難しくなっているが、その編纂された時代を考えると、極めて高く評価すべき量（語彙数）と記述内容を備えている。大武編（1937）の歴史的価値は、池上他編（1996）が出版されても、いささかも減ずることはない上、大きく時代が離れている2つの辞書を単純に比較し、その優劣を決定することはできないと考えられる。
- (3) Aurélio Buarque de Holanda Ferreira（1910-1989）は、すでに亡くなっているが、辞書編纂は引き続き妻 Marina Baird Ferreira と Margarida dos Anjos が行っている。
- (4) decasségui の場合、以前から見出語に掲載されている gueixa「芸者」、cabúqui「歌舞伎」、quimono「着物」などの日本語に由来する語と同様に、綴り字表記がポルトガル語化されていることも注目に値する。同じ日本語に由来する語であっても、karaoke「カラオケ」、kanji「漢字」などは綴り字表記がポルトガル語化されないまま掲載されている。
- (5) VDPB では "O alfabeto fonético usado é o internacional ...."(VIII) と述べられているが、国際音声字母に従わない表記（[ř], [r]）も見られる。
- (6) ABLN の発音表記を観察するとリオ・デ・ジャネイロのポルトガル語に基づいていることがわかる。リオは編者である Nascentes（1886-1972）が生まれ、生活した場所である。
- (7) transitivo はラテン語 transire に由来する用語であり、本来、受動態に変わりうるという特徴から付けられた名称である。つまり、本来、transitivo と intransitivo は、受動態に変わりうるか否かという特徴において区別されたものである。受動態に変わらない verbo de ligação は、この点では、verbo intransitivo と共通する。

## 【参考文献】

- Ali, M. Said. (1964): *Gramática Secundária da Língua Portuguesa. Melhoramentos. São Paulo.*
- Borba, Francisco da Silva.(coordenador) (1997): *Dicionário gramatical de verbos do português contemporâneo do Brasil. UNESP, São Paulo.*
- Câmara Jr., J. Mattoso. (1978): *Dicionário de Lingüística e Gramática. Vozes, Petrópolis.*
- Fernandes, Francisco. (1991): *Dicionário de Verbos e Regimes.*

Globo, São Paulo.

池上岑夫. (1992): 「ポルトガル語の辞書」 竹林滋 千野栄・東信行 (編) 『世界の辞書』 314-333. 研究社.

彌永史郎. (1989): 「辞書学的にみたポルトガル語動詞の分類法」 『京都外国語大学研究論叢』 XXXIII号: 277-289.

彌永史郎. (1990): 「C. P. ルフトの動詞分類」 『京都外国語大学研究論叢』 XXXV号: 166-181.

Luft, Celso Pedro. (1986): *Moderna Gramática Brasileira*. Globo, Rio de Janeiro.

Luft, Celso Pedro. (1987): *Dicionário Prático de Regência Verbal. Ática*, São Paulo.

Luft, Celso Pedro. (1989): *Gramática Resumida*. Globo, São Paulo.

Luft, Celso Pedro. (1992): *Dicionário Prático de Regência Nominal. Ática*, São Paulo.

Perini, Mário A. (1996): *Gramática descritiva do português*. Ática, São Paulo.

#### 【一般辞書】

*Dicionário da língua portuguesa*. 1º tomo (1961), 2º tomo (1964), 3º tomo (1966), 4º tomo (1967), elaborado por Antenor Nascentes, Academia Brasileira de Letras, Imprensa Nacional, São Paulo. [ABLN]

*Dicionário Universal da Língua Portuguesa*. (1999), Texto, Lisboa. [DULP]

Ferreira, Aurélio Buarque de Holanda. (1994): *Novo Dicionário da Língua portuguesa*, 2ª ed. 27ª imp. Nova Fronteira. Rio de Janeiro.

Ferreira, Aurélio Buarque de Holanda. (1999): *Novo Aurélio Século XXI: o dicionário da Língua portuguesa*. Nova Fronteira. Rio de Janeiro.

浜口乃二雄・佐野泰彦 編. (1973): 『ポルトガル語小辞典』 第6版 大学書林.

坂根茂・日向ノエミア. (1993): 『ローマ字ポ和辞典』 改訂新版第9刷 柏書房.

池上岑夫・金七紀男・高橋都彦 編. (1996): 『現代ポルトガル語辞典』 白水社.

*Michaelis: moderno dicionário da língua portuguesa*. (1998), Melhoramentos, São Paulo. [MDLP]

Vilela, Mário. (1990): *Dicionário do Português Básico*. Asa, Rio Tinto. [VDPB]